

- 1 課題名 養殖衛生管理体制整備事業（内水面）
- 2 区分 国交付金（国費：県費＝1：1）
- 3 期間 平成15年度～
- 4 担当 内水面試験地（藤井久之・高橋芳明・中山仁志）
- 5 目的

本県内水面漁業の主幹であるアユ養殖業は18経営体（中間育成場を含む）で、全国第1位の生産量1,243 t（平成20年現在）となっているが、魚病が多発し経営を圧迫する大きな問題となっている。このため、防疫対策の推進と安全な養殖生産物の供給を目的として、養殖アユを中心とした魚病診断・指導、種苗導入直後の保菌検査や医薬品残留検査等を行なった。

6 成果の要約

1) 調査方法

- (1) 魚病の診断・指導：アユは養殖業者から診断を依頼されたものや防疫パトロール時に採取したものについて、外部症状や内臓の病変等を観察するとともに、寄生虫の有無を調べ、腎臓から菌分離を行なった。分離菌は抗血清又はPCRにより同定し、必要に応じて薬剤感受性を調べた。ニシキゴイとマゴイは、販売業者や個人愛好家から診断を依頼された検体や河川、ため池でのへい死魚について、菌分離及び病勢鑑定指針によるKHVのPCR検査を行った。
- (2) 保菌検査：アユ養殖業者を対象に導入直後と放流直前の種苗の保菌検査を行なった。対象とした疾病は、冷水病、エドワジェーラ・イクタルリ感染症、ビブリオ病、エロモナス感染症である。
- (3) 医薬品残留検査：投薬歴のある出荷直前のアユを対象に平成21年8～9月にスルフィイソゾール、フロルフェニコールの残留検査を行なった。スルフィイソゾールは2業者から採取した各3検体（1検体は同一池から採取した5尾、以下同様）、計6検体、フロルフェニコールは1業者から採取した4検体について、財団法人日本冷凍食品検査協会（関西事業所）に依頼した。

2) 成果の概要

- (1) 魚病の診断・指導：平成20年12月から平成21年9月までの疾病検査はアユでは冷水病1件、冷水病とエロモナス感染症の混合感染2件、ビブリオ病3件、ボケ病8件、不明3件、計17件であり、ボケ病の占める割合が47%と最も高かった。ニシキゴイでは眠り病とエロモナス感染症の混合感染1件、ヘラブナでエロモナス感染症1件、アマゴで不明1件であった（資料1）。
- 分離された冷水病菌はスルフィイソゾール、フロルフェニコールに、ビブリオ病菌（血清型C）はオキシリン酸、フロルフェニコール、スルファモノメトキシシ及びオルメトプリム配合剤にいずれも高い感受性を示した。エロモナス菌は一部の株がオキシリン酸、スルファモノメトキシシ及びオルメトプリム配合剤、フロルフェニコールに感受性を示した（資料2）。KHV検査はニシ

キゴイ9件、マゴイ4件であり、うち個人池で飼育されているニシキゴイ2件が陽性であったため、所有者に対しニシキゴイの移動禁止、消毒の徹底等のまん延防止措置を指導した。（資料3）。

(2) 保菌検査：平成20年12月から平成21年6月に11件について保菌検査を実施したところ、いずれも病原細菌は検出されなかった（資料1）。

(3) 医薬品残留検査：スルフィイソゾール6検体、フロルフェニコール4検体について実施したが、いずれも残留は認められなかった。

7 成果の取り扱い

1) 成果の普及

防疫パトロール時に、適宜養殖業者等に指導・普及した。

2) 成果の発表

平成21年度県内養殖衛生対策会議